

# 発話行為の解釈に影響を及ぼすパワー (権力) 関係の考察 —— 発話行為理論を援用して<sup>(1)</sup> ——

稲 永 知 世

本稿は、話し手の発話行為 (speech acts) に対する聞き手の解釈に対して、また話し手によるこれまでの発話行為に関する弁明に対して、パワー (権力) 関係 (power relations) がどのような影響を及ぼしているのかということを、批判的ディスコース分析 (critical discourse analysis, CDA) の観点から考察する。上記の目的を果たすため、本稿は、ディスコース (discourse) を分析するための理論の1つである語用論 (pragmatics)、特に Austin (1962) や Searle (1969) の発話行為理論 (speech act theory) を援用し、元 FBI 長官 James B. Comey 氏による Donald Trump 米大統領との会話メモ、および米上院情報特別委員会の公聴会における同氏の議会証言に関する *The New York Times* の新聞記事を取り上げ、Trump 米大統領によって遂行されたとされる発話行為を分析する。

## 2. 方法論

### 2.1 批判的ディスコース分析 (Critical Discourse Analysis, CDA)

批判的ディスコース分析とは、ディスコース (言語使用) に埋め込まれた支配的イデオロギーの表出、差別・支配といった不平等な権力関係の明確化を目的とする、「社会的な権力支配 (の再生産) における談話の役割に焦点を当てた」(野呂2001: 17) 談話分析研究のことである。

従来の談話分析へのアプローチは、記述的 (descriptive) な目標を持つ (Brown and Yule 1983; Stubbs 1983など)。このことは、相互行為を行う

人たちが意味を伝達し、解釈する際の語用論的秩序、そして彼らが相互行為において、互いを理解する時に用いる言語的そして／あるいは非言語的手がかりを記述することを意味する (Holmes 2008)。しかしながら、人々が言語を使用する方法の基盤となる背景知識は、中立的ではなく、権力関係、社会的距離、ジェンダー関係といった様々な要素から影響を受けており、人々は、様々な言語ストラテジーを通じて、現存する世の中を維持したり、あるいは逆にそれを変えようと試みたりする。それゆえ、批判的ディスコース分析は、言語がどのような働きをするのかを記述するだけでなく、語用論的秩序によって再生産される背景知識（社会的および政治的イデオロギー）を明らかにするという「批判的な (critical)」目標を持つのである。また、Wodak and Meyer (2016 : 2) によると、従来の談話分析と批判的ディスコース分析の間の決定的な違いは、後者が「構成的で、問題指向の、学際的アプローチ (the constitutive problem-oriented, interdisciplinary approach)」であることに依拠するという点である。そして、このような目標の違いは、ディスコースの捉え方と連動している。

ディスコースという用語は、分野を越えて幅広く使用されているが、言語学者の間でも、彼らが何を明らかにしたいのかに応じて定義付けが異なる (Mills 1997)。しかしながら、ディスコースの定義の大半は、以下の3つのテーマの変形である (Cameron and Pavonić 2014 ; Tannen et al. 2015) :

1. Discourse as language 'above the sentence' (文よりも大きい単位)
2. Discourse as language 'in use' (言語使用)
3. Discourse as a form of social practice (社会的実践)

談話分析者がディスコースを「文よりも大きい単位」の言語として扱う場合、それは、単文よりも大きい言語単位における構造パターンを分析することを意味する。2の定義は、1よりもより社会的である。この定義の本質的な特徴は、特定のコンテキスト (context) において言語使用が何を、そしてどのように伝達するのかに注目しているという点であり、談話分析者は、「社会的な場面

での言語使用の複雑な構造とメカニズムを記述する」(Cameron 2001: 7)。社会的側面により一層注目が置かれると、言語使用としてのディスコースのより広範な概念は、社会的実践 (social practice) の一形態、つまり、世の中を表象するだけでなく、世の中を構築する実践 (Fairclough 1992: 64) として解釈される。このことは、社会的実践としての言語使用が何かを所与の事実として伝達するだけでなく、それを事実をとして構築することを意味している。この定義は、言語学というよりむしろ社会理論 (social theory) に由来する (Cameron and Pavonić 2014: 6)。批判的ディスコース分析がディスコースを「社会的実践としての言語」(Fairclough and Wodak 1997) とみなす場合、言語の社会的、文化的、歴史的コンテキストが必要不可欠となる。

批判的ディスコース分析は、ある特定の決まった理論や研究方法を有する学派を指すわけではない。むしろ、問題指向の学際的な研究動向である (Fairclough et al. 2011; Wodak and Meyer 2016)。したがって、批判的ディスコース分析を実践するための1つの方法というものは存在せず、批判的ディスコース分析を実践する研究者は、テキストやトークを批判的に研究するために、様々な手法やアプローチの中から、個々の研究目的に適したものを選択する (Fairclough et al. 2011: 357; van Dijk 2015: 466)。そこで、本稿は、Donald Trump 米大統領によって遂行されたとされる発話行為に対するパワー（権力）関係の影響を明らかにするために、語用論における発話行為理論を援用する。

## 2.2 発話行為理論 (speech act theory)

本稿が援用する発話行為理論は、語用論の主要なテーマの1つと考えられている (Levinson 1983)。語用論とは、話し手、聞き手、そして発話のコンテキストに依拠する、意味と言語使用の研究のことであり、「話し手がある言葉を用いてどのようなことを意味しようとするのか、また聞き手がどのような意味としてそれを受け取るのかといったように、具体的な言語使用の場面で言葉が話し手や聞き手ともつ関係の中で、その意味をとらえようとする」(中島 2012: 1) 研究である。語用論の知見は日常言語哲学 (ordinary language

philosophy) 派が寄与するところが大きいと言われている。

語用論の主要なテーマの1つである発話行為理論 (Austin 1962 ; Searle 1969) は、何らかの行為をことばを通じて実行するための手段として発話を捉える理論のことであり、主に言語哲学者 J. L. Austin と John Searle によって発展した (詳細に関しては、Austin (1962)、Levinson (1983)、Searle (1969) などを参照)。この理論において、発話行為とは、人が何かを言う (発話する) 際に、常に実践されている何らかの社会的行為を表す。人がことばを発する際、ただ単に真となる事実を述べることも以外にも多様な社会的行為が繰り広げられているのである。

そして、言語哲学者 J. L. Austin (1962) は、ことばを用いた行為 (発話行為) を分析する際に3つのレベルに記述できると主張した。まずは発語行為 (locutionary act) である。発語行為とは、ある意味内容のことを「言う」という言語表現行為そのものを表し、例えば、“The bar will be closed in 10 minutes.” という発話の場合、「10分でバーを閉める」ということを言う (say) 行為そのものを指す。次に、発語内行為 (illocutionary act) とは、その言葉を発する行為 (発語行為) を通して遂行される行為である。一般的に、「発話行為 (speech act)」という場合、この発語内行為を指すことが多い。先の例で言うならば、発語内行為とは、「10分でバーを閉める」ということを知らせる (inform) 行為である。最後に、発語媒介行為 (perlocutionary act) とは、発語内行為 (発話行為) の結果として生じる聞き手に対する効果 (effect) ・結果 (つまり聞き手に何かをさせる行為) のことである<sup>(2)</sup>。先の例で言うならば、例えば、発話の結果、客にラストオーダーをさせる (get) 行為が、発語媒介行為にあたる。

また、発話行為は、直接発話行為 (direct speech act) と間接発話行為 (indirect speech act) に分類される。直接発話行為とは、文構造と機能間の関係が直接的で、文型から予想される発話行為であり、発話の意味が文字通りにそのまま伝えられるものである。例えば、学校の休み時間中、教室で机に向かって同級生に対して “What are you doing?” と発する場合、「今何をしているのか」を相手に質問するという直接発話行為を遂行していることにな

る。しかし、発話行為としては同じであっても、発語内行為としては異なる場合がある。例えば、机間巡視中の教員が携帯電話を見ている学生に対して同じ発話行為を遂行した場合には、「携帯電話を見るな」と警告するという発話行為になるだろう。このように、必ずしも文構造と機能が一致しているとは限らず、そのような場合の発話行為は間接発話行為と呼ばれる。間接発話行為は、文構造と機能間の関係が間接的で、文型から予想される発話行為とは別の発話行為を遂行している場合であり、話し手が発話によってその発話の文字通りの意味と異なる内容を間接的に伝えることになる。また、発話行為が異なっても、発語内行為は同じ場合もある。例えば、昼食のメインが肉または魚だった日のことを思い返して、“I liked that lunch!”と発話した人に対して、自分は気に入らなかったということを直接的に“I didn’t like it.”と言ったり、間接的に“I’m a vegetarian.”と言ったりすることが可能なのである。

言語哲学者 John Searle は、私たちの言語使用において重要な発語内力 (illocutionary force) に着目して、発語内行為（発話行為）を以下の5つに分類したのである (Searle 1969)。まず、表示型 (representatives) である。この型は、話し手が発話内容が真であるという信念を持ち、聞き手にその信念を知らせることを目的とする発話行為である (例 “I flew to New York last June.”)、その発話行為を直接的に示す遂行動詞 (performative verbs) として、assert, claim, conclude, deny, inform, predict などが挙げられる。次は、指示型 (directives) である。指示型は、聞き手にある行為をしてほしいという願望やそれをすべきだという判断を、聞き手に実現させようと話し手が試みる発話行為である (例 “Please come on.”)。指示型の発話行為を直接的に遂行するために用いられる遂行動詞には、advise, ask, order, recommend, suggest などが挙げられる。次の行為拘束型 (commissives) は、話し手がこれから先に、ある行為を実行する意志を表明する発話行為であり、話し手自身の行為に関わる点が指示型との違いである (例 “I guarantee to pay his debts.”)。また、行為拘束型の発話行為を遂行する際に使用される遂行動詞は commit, offer, pledge, promise, refuse, threaten, warrant などである。そして、感情表明型 (expressives) は、発話内容の表す事柄に対し何らかの感情

を持ち、その感情を聞き手に表明する発話行為であり（例 “What a pity!”）、その行為を表す動詞としては、apologize, congratulate, complain, thank, wish, welcome などが挙げられる。最後に、宣言型（declaratives）である。この型は、発話することにより、その場面に新たな状況をもたらそうと試みる発話行為であり（例 “I name this ship *Aurora*.”）、宣言型の行為を表す動詞としては、appoint, declare, judge, nominate, pronounce, sentence などがある。

そして、発語内行為（発話行為）を適切に遂行するためには一定の条件が満たされなければならない、その条件は、適切性条件（felicity conditions）と呼ばれている。適切性条件には下位条件が存在し、その下位条件は以下の通りである：(1) 命題内容条件（propositional content condition：発話の命題内容を適切なものにするための条件）、(2) 事前条件（preparatory condition：会話の当事者や会話の状況に関する条件）、(3) 誠実性条件（sincerity condition：発話者の意図が誠実かどうかに関する条件）、そして(4) 本質条件（essential condition：発話によりある行為が発生するかどうかに関する条件）である。例えば、“I pronounce you husband and wife.” と発話し、ある男女を夫婦だと宣言するには、その発話行為を遂行する人物が神父でなければならない、もし小さい子どもが言ったとしても、事前条件を満たしていないことになり、その行為は宣言型の発話行為とは認識されないのである。

## 2.3 発話行為とパワー（権力）関係

次に、発話行為とパワー（権力）関係の関係性について言及する。Fairclough (2015: 167) によると、発話行為の価値、あるいは「効果」を明らかにするためには、その発話行為が発生するのはどの種の状況的コンテキストにおいてであるのか、そしてどのディスコースタイプ（discourse type）が作用しているのかを知る必要がある。例えば、教師と生徒とのやりとりの場合、その発話行為は、明白なパワー（権力）関係が存在するコンテキストにおいて発生し、教師が主導権を握ることが多い講義（lecture）というディスコースタイプが主に作用している。教師が生徒にドアを閉めるようにと指示する際に

“The door’s still open.”と発話するか、それとも “Did you shut the door?”と発話するかという選択は、話し手の役割を担うことが多い教師と聞き手の役割を担うことが多い生徒間のパワー（権力）関係に依拠し、前者が選択される、つまり「間接的な命令、要求が起こるのは、パワー（権力）関係があまりにも明らかであり、教師が直接的に言う必要がない場合である」（Fairclough 2015：167）と考えられている。逆に、間接的な命令、要求が相手に対する負荷を低減するための方法（すなわち、negative politeness（主に聞き手の negative face（自分に負担を課さないでほしい、距離を置いてほしいなどといった欲求）に配慮した言語行動）（Brown and Levinson 1987））として用いられる場合もある。

また、あるディスコースタイプにおいてどの発話行為が遂行される傾向にあるのかということは、主体（subjects）や彼らの間の社会関係がどういったものであるのかに関するイデオロギーを表象することにつながり、「主体間の権利や義務の非対称性は、質問したり、行為を要求したり、不満を言ったりする非対称な権利、そして答え、行動し、自分の行動を説明する非対称な義務において、具現化されることがある」（Fairclough 2015：168）と言われている。つまり、発話行為の慣習を見ることにより、相互行為者間のパワー（権力）関係がわかるのである。

ここで、指示型の発話行為、特に質問という発話行為に見られるパワー（権力）関係を示す例を2つ取り上げる。質問は、相手に返答をさせるという義務を課すことから、指示型の発話行為と考えられている。まずは、Fairclough (2015) における警察官と目撃証人とのやりとり<sup>(3)</sup>である（下線部は筆者による）。この談話のディスコースタイプは、警察官と目撃証人による情報収集のための事情聴取（police-witness information-gathering interviews）である。

- (1) P: ① Did you get a look at the one in the car?
- (2) W: ② I saw his face, yeah.
- (3) P: What sort of age was he?
- (4) W: About 45. ③ He was wearing a ...



- (5) P: ④ And how tall?
- (6) W: ⑤ Six foot one.
- (7) P: Six foot one. Hair?
- (8) W: Dark and curly. ⑥ Is this going to take long? I've got to collect the kids from school.
- (9) P: Not much longer, no. What about his clothes?
- (10) W: ⑦ He was a bit scruffy-looking, blue trousers, black...
- (11) P: ⑧ Jeans?
- (12) W: Yeah. (Fairclough 2015 : 52)

この警察官と目撃証人とのやりとりは、質問－返答 (question－answer) から成り立ち、警察官の質問は、聞き手に「負担を課す (impositive)」発話行為、つまりその負担をすべきだという判断を聞き手に実現させようと試みる、指示型の発話行為である。

警察官の質問 (① “Did you get a look at the one in the car? (車の中にいる人を見ましたか?)” そして④ “And how tall? (そして身長は?)” など) は文構造 (疑問文 (interrogative)) と機能 (質問 (question)) の関係が直接的であり、目撃証人の返答 (② “I saw his face, yeah. (はい、彼の顔を見ました。)” そして⑤ “Six foot one. (6 フィート 1 インチです。)” など) の仕方は、警察官に尋ねられたことだけに返答するものとなっている。これは、ディスコースタイプが警察官と目撃証人による情報収集のための事情聴取であることに依拠しているからであり、質問する権利を有する警察官とその権利を持たない目撃証人の間にパワー (権力) 関係が存在していることを反映していると考えられる。

それゆえ、目撃証人は、③ (“He was wearing a... (彼が身に着けていたのは…)”) や⑦ (“He was a bit scruffy-looking, blue trousers, black... (彼の見た目は少し汚い感じで、青いズボンで、黒の…)”) のように、警察官に質問されていないことを答えたり (③)、必要以上に長く返答したり (⑦) すると遮られ、⑥ (“Is this going to take long? (長くかかりますか?)”) のよ



うに、目撃証人が質問する権利を与えられていないにも関わらず質問をすると、その質問は遮断され、好ましいとされる（preferred）返答を警察本人が⑧“Jeans?（ジーンズ？）”において遂行しているのである。

次の例は、映画『The Devil Wears Prada（邦題：プラダを着た悪魔）』的一幕（Scene 2：The first day / Chapter 6）である。ジャーナリストを目指してニューヨークにやってきた Andrea Sacks は、なかなか就職先が決まらず、最終的にファッション業界における伝説と称されるファッション誌『Runway』の編集長 Miranda Priestly の第2アシスタントの職に就くことになる。そして、初出勤の日、第1アシスタントの Emily Charlton から仕事内容を教えてもらった後の場面である。

Miranda: I need ten or fifteen skirts form Calvin Klein.

Andrea: O... okay. ⑨ What kind of skirts do you...?

Miranda: ⑩ Please bore someone else with your questions. And make sure we “have” Pier Fifty-nine at eight a.m. tomorrow. And remind Jocelyn I need to see a few of those satchels that Marc is doing in the pony. And then tell Simone I’ll take Jackie if Maggie isn’t available. Did Demarchelier confirm?

Andrea: Di... Did Demarchel...?

Miranda: Demarchelier. Did he... Get him on the phone.

Andrea: Uh, o... okay

Miranda: And, Emily.

Andrea: Yes?

Miranda: That’s all. (to staff) It’s the cavalier disregard for clear...

編集長の Miranda に Calvin Klein のスカートを手10～15枚取ってくるようにと指示された Andrea は、どのようなタイプのスカートが必要なのかと質問する（⑨ “What kind of skirts do you...?”）。それに対して、Miranda は自分につまらない質問をしないようにと暗示的に（間接的に）指示する（⑩

“Please bore someone else with your questions”)。この⑨と⑩のやりとりにおいて、Andrea と Miranda 間の権利や義務の非対称性が、質問する非対称的な権利、そしてそれに答える非対称的な義務（つまり、Miranda には質問する権利がある一方、Andrea には質問する権利はなく、尋ねられた質問に返答する義務しか持たないという非対称性）において具現化されている。

また、(Andrea を除く) 部下たちが、編集長である Miranda と部下たちとの間における権利や義務の非対称性を認識していることは、以下の Andrea と Emily の⑪と⑫のやりとりからわかる。

Emily: Oh, leave it.

Andrea: Do you have...? Oh.

Emily: I have Miranda Priestly calling. I have Patrick!

Andrea: Uh, uh, no. she, she called me in there and, and then she asked me about, uh, Pier Fifty-nine. And, uh, there was something about Simone, Frankie, someone else. And, uh, she needs skirts. Calvin Klein. And, uh, there was something about a pony.

Emily: Did she say which skirts?

Andrea: No.

Emily: Did she say what kind?

Andrea: No. Gosh, I, ⑪I tried to ask her.

Emily: ⑫You never ask Miranda anything... Right. I will deal with all of this, and you will go to Calvin Klein.

Miranda の要求に困惑した Andrea が第1アシスタントの Emily からの「どのようなスカートだと彼女 (Miranda) は言ったのか」という質問に対して、⑪ (“I tried to ask her. (私は彼女に尋ねようとした。)” ) において、Miranda に質問するという指示型の発話行為を遂行しようとしたという旨を告げる。ただし、⑫ (“You never ask Miranda anything... (決して Miranda には何も質問しないで…)”) において、Emily から Miranda に質問してはいけない

と返されるのである。⑫の“never ask”から、EmilyはMirandaと部下の間に存在する権利や義務の非対称性を認識しており、編集長Mirandaとアシスタントの間には強固なパワー（権力）関係が存在していることが見て取れる。このことから、パワー（権力）がない主体には、「負担を課す（impositive）」発話行為（本例では、指示型の発話行為）が認められていない場合が多いことがわかる。

### 3. 先行研究

Wodak（2007）は、オーストリアの右派政治家 Jörg Haider の選挙スピーチにおける3つの発話を分析しながら、語用論と批判的ディスコース分析を結び付けた研究の重要性に言及している。特に、オーストリアにおける戦後の反ユダヤ主義（anti-Semitism）を記述するのに重要な語用論的概念として、ほめかし（insinuation）や前提（presupposition）に注目し、Haiderが反ユダヤ主義的ステレオタイプを使用してきた程度について検証している。同研究において、Wodakは、発話行為理論における前提の分析により、テキスト産出の基礎をなす暗示的想定（implicit assumptions）や間テキスト関係（intertextual relations）を明白にすることができると主張している（Wodak 2007：213）。

また、Fowler（1991）は、批判的言語学（critical linguistics）の観点から、新聞記事における言語、特に他動性（transitivity）、節（clauses）の変形、語彙構造、モダリティ（modality）や発話行為といった対人的要素などの言語的特徴を分析することにより、新聞記事におけるディスコースとイデオロギーを検証している。特に、発話行為に関して、Fowlerは、*The Sun* の“Join the club”や“Wasn't it fun?”といった例を取り上げながら、「命令や質問といった種類の発話行為が印刷されたテキストにおいて頻出で顕著である場合、対人的相互作用的な意味が強調される」（Fowler 1991：65）と述べている。

本稿は、批判的ディスコース分析の観点から、Donald Trump 米大統領に

よって遂行されたとされる発話行為を分析し、Trump 米大統領の発話行為が Comey 氏によってどのように解釈されたのか、またその発話行為が Trump 大統領周辺の人物によってどのように弁明されたのかを考察する。その際に、Austin (1962) による発話行為の分類、Searle (1969) による発語内行為の分類や適切性条件にも言及しながら分析する。

#### 4. 分析データ

本稿が Donald Trump 米大統領の発話行為を分析するために扱うデータは以下の通りである。

まず1つ目は、元 FBI 長官 James B. Comey 氏の Donald Trump 米大統領との会話メモ “Statement for the Record Senate Select Committee on Intelligence” (2017年6月8日) である。この会話メモは、米国上院情報問題特別調査委員会 (United States Senate Select Committee on Intelligence) の議長 Richard Burr と幹部メンバーである Mark Warner に促されて書かれたものであり (“Chairman Burr, Ranking Member Warner, Members of the Committee. Thank you for inviting me to appear before you today. I was asked to testify today to describe for you my interactions with President-Elect and President Trump on subjects that I understand are of interest to you.” (Comey 2017))、‘January 6 Briefing’、‘January 27 Dinner’、‘February 14 Oval Office Meeting’、‘March 30 Phone Call’、そして‘April 11 Phone Call’から構成されている。

そして、2つ目のデータは、*The New York Times* の “Comey Accuses White House of “Lies” and Says Trump Tried to Derail Inquiry” (2017年6月8日) というタイトルの新聞記事である。これは、米上院情報特別委員会の公聴会における元 FBI 長官 James B. Comey 氏の議会証言を中心に、共和党員などによる Donald Trump 米大統領への擁護などに言及した、第1から第16パラグラフで構成されている新聞記事となる。

## 5. 分析

### 5.1 元 FBI 長官 James B. Comey 氏の Donald Trump 米大統領との会話メモ

まず、元 FBI 長官 James B. Comey 氏の Donald Trump 米大統領との会話メモ、“Statement for the Record Senate Secret Committee on Intelligence” (James, B. Comey, June 8, 2017) の中で、特に元大統領補佐官 Michael T. Flynn 氏によるロシアとの接触に関する捜査への言及がある “February 14 Oval Office Meeting” を分析する。

#### February 14 Oval Office Meeting

(pl.)

When the door by the grandfather clock closed, and we were alone, the President began by saying, “I want to talk about Mike Flynn.” Flynn had resigned the previous day. The President began by saying Flynn hadn’t done anything wrong in speaking with the Russians, but he had to let him go because he had misled the Vice President. He added that he had other concerns about Flynn, which he did not then specify.

The President then made a long series of comments about the problem with leaks of classified information — a concern I shared and still share. After he had spoken for a few minutes about leaks, Reince Priebus leaned in through the door by the grandfather clock and I could see a group of people waiting behind him. The President waved at him to close the door, saying he would be done shortly. The door closed.

The President then returned to the topic of Mike Flynn, saying, “He is a good guy and has been through a lot.” He repeated that Flynn hadn’t done anything wrong on his calls with the Russians, but

had misled the Vice President. ⑬He then said, “I hope you can see your way clear to letting this go, to letting Flynn go. He is a good guy. I hope you can let this go.” I replied only that “he is a good guy.” (In fact, I had a positive experience dealing with Mike Flynn when he was a colleague as Director of the Defense Intelligence Agency at the beginning of my term at FBI.) I did not say I would “let this go.”

The President returned briefly to the problem of leaks. I then got up and left out the door by the grandfather clock, making my way through the large group of people waiting there, including Mr. Priebus and the Vice President.

I immediately prepared an unclassified memo of the conversation about Flynn and discussed the matter with FBI senior leadership. ⑭ I had understood the President to be requesting that we drop any investigation of Flynn in connection with false statements about his conversations with the Russian ambassador in December. I did not understand the President to be talking about the broader investigation into Russia or possible links to his campaign. I could be wrong, but I took him to be focusing on what had just happened with Flynn’s departure and the controversy around his account of his phone calls. Regardless, it was very concerning, given the FBI’s role as an independent investigative agency…

2017年2月14日は元々テロ対策に関するブリーフィングが計画されており、そのブリーフィング後 James B. Comey 氏は大統領執務室に残るように言われ、Donald Trump 米大統領と話をしたという流れである。二重下線部から、Michael T. Flynn 氏のことが話題に上ったことがわかる。

⑬の “I hope you can see your way clear to letting this go, to letting Flynn go. He is a good guy. I hope you can let this go.” において、Donald Trump 政権の元国家安全保障問題担当大統領補佐官 Michael T. Flynn 氏

(2017年2月13日辞任) がロシア連邦駐米大使とロシア制裁問題を話し合った疑惑の調査に関して、感情表明型の直接発話行為が遂行されている (“I hope (私は望んでいる)”)。そして、⑭の “I had understood the President to be requesting that we drop any investigation of Flynn in connection with false statements about his conversations with the Russian ambassador in December.” から、感情表明型の直接発話行為を James B. Comey 氏は、指示型の間接発話行為 (“requesting (要求)”) であると理解していたことがわかる。

FBI (米国連邦調査局) はアメリカ政府から独立した調査機関ではあるものの、米大統領と FBI 長官の間には (権限の違いに基づく) 明らかなパワー (権力) 関係が存在していることから、直接的に要求をしなくても、パワー (権力) の小さいもの (James B. Comey 氏) が暗示的な要求であると推測したのだと考えられる。また、⑬の “see your way clear to letting this go, to letting Flynn go” や “let this go” のように、Donald Trump 米大統領が感情表明型の直接発話行為で望ましいこととして示しているのは、「Flynn 氏を放っておく」という James B. Comey 氏の今後の行為である (“you can”)。感情表明型に分類される “hope” の命題内容条件は必ずしも聞き手の行為に関係している必要はないが、今回 Trump 米大統領は、聞き手である Comey 氏の未来の行動に言及している。そして、要求 (request) の命題内容条件は聞き手の未来の行為に関するものであることから (Searle 1969)、Comey 氏が、感情表明型の発話内行為 (発話行為) における発話内目標を (Comey 氏の今後の行為に対する) 要求であると理解したのだと考えられる。

## 5.2 *The New York Times* の新聞記事 “Comey Accuses White House of “Lies” and Says Trump Tried to Derail Inquiry”

本節は、米上院情報特別委員会の公聴会における James B. Comey 氏の議会証言に関する *The New York Times* の新聞記事 “Comey Accuses White House of “Lies” and Says Trump Tried to Derail Inquiry” の中で、第4パラグラフ、第13および14パラグラフ、そして第16パラグラフに焦点を当て



る。まず、第4パラグラフでは、Donald Trump 米大統領を擁護した共和党員の発言に焦点が当てられている。

Republicans who came to Mr. Trump’s defense argued that ⑮he had been making a suggestion, not ordering Mr. Comey to drop the investigation into the former adviser, Michael T. Flynn. Mr. Comey demurred on whether the president’s actions had amounted to a felony, but ⑯said the intent was clear: “I took it as a direction.” If Mr. Trump had had his way, Mr. Comey said, “We would have dropped an open criminal investigation.”

Donald Trump 米大統領を擁護するために公聴会に出席した共和党員は、⑮の “making a suggestion, not ordering” において、元大統領補佐官 Michael T. Flynn 氏に対する調査を中止するよう、命令 (“order”) したのではなく提案 (“make a suggestion”) したのだと言うことにより、遂行されたとされる指示型の発話行為における種類の違いに言及し、Trump 米大統領を擁護している。だが、このことは、共和党員の発言が、Trump 米大統領が指示型の発話行為を遂行したという前提に基づいていることを意味するのである。

そして、⑯では、James B. Comey 氏は、その指示型の発話行為（発語内行為）における発語媒介目標が明らかであったこと (“the intent was clear (その意図は明白だった)”）、そしてその発話行為を指示 (“direction”) として捉えたと発言する（ただし、Comey 氏がその指示を受け入れるという発語媒介目標は未達成であることが、5.1の会話メモにおける “I did not say I would ‘let this go’” からわかる）。これは、Comey 氏と Donald Trump 米大統領のパワー（権力）関係、またその場に2人しかいなかったという状況的コンテキストに依拠していると考えられる。

次に注目するのは、第13および14パラグラフにおける、Donald Trump 米大統領の顧問弁護士 Marc Kasowitz 氏による公聴会後の発言である。Kasowitz 氏は、Trump 米大統領が James B. Comey 氏に忠誠の誓いを求めたこ

ともなければ、Michael T. Flynn 氏の調査を中止させようとしたこともないと発言している。

In a statement after the hearing, Mr. Trump's personal lawyer, Marc Kasowitz, portrayed Mr. Comey as a leaker who had tried to undermine the Trump administration. He said Mr. Trump had never sought a loyalty pledge from Mr. Comey. And he flatly denied that the president had tried to end the Flynn investigation.

“⑰The president never, in form or substance, directed or suggested that Mr. Comey stop investigating anyone,” Mr. Kasowitz said.

第4パラグラフにおける共和党員による擁護とは対照的に、Donald Trump 米大統領の顧問弁護士 Marc Kasowitz 氏は、⑰の “never... directed or suggested（決して指示したり提案したりはしなかった）” において、Trump 米大統領が遂行したとされる指示型の発話行為における種類の違いに関する共和党員の主張、そしてその主張の基礎をなす Trump 米大統領が指示型の発話行為を遂行したという前提を完全に否定している。

また、⑰の “in form or substance（形式的にも、本質的にも）” から、Marc Kasowitz 氏は直接発話行為および間接発話行為ともに指示型の発話行為を遂行していないことを意味している。これは顧問弁護士としては当然の行為であり、James B. Comey 氏による会話メモに記載された Donald Trump 米大統領による感情表明型の発話行為に基づく発言（⑬ “I hope you can see your way clear to letting this go, to letting Flynn go. He is a good guy. I hope you can let this go.”）が真実である場合、「直接発話行為として指示も提案もしてない」という主張は正しいことになる。ただし、話者による発話行為の意図と聞き手によるその発話行為に対する解釈は当事者にしか分からないことである。このことから、「間接発話行為として指示も提案もしてない」という主張の証明にはなっていないと考えられる。

最後に、第16パラグラフでは、Donald Trump 米大統領の息子 Donald

Trump Jr.氏による Twitter での発言に焦点が当てられている。

The president's son Donald Trump Jr. weighed in on that question on Twitter during the hearing. “⑬Knowing my father for 39 years when he ‘orders or tells’ you to do something there is no ambiguity, you will know exactly what he means,” he wrote.

Donald Trump 米大統領の息子 Donald Trump Jr. 氏は、⑬の分詞構文後半において、Trump 大統領が指示型の発話行為（“‘orders or tells’（指示したり命令したりする）”）を遂行する際に、（その行為には）曖昧さが全くないと発言している。つまり、Trump 米大統領が指示型の発話行為を遂行する際には、明示的に直接発話行為として遂行するということを意味している。

ただし、ここでは、分詞構文の前半 “Knowing my father for 39 years (39年間自分の父親のことを知っているの)” が注目に値する。Donald Trump Jr. 氏が言及しているのは、米大統領ではなく、父親としての Donald Trump である。James B. Comey 氏の場合と比較して、Trump 米大統領と Donald Trump Jr. 氏（すなわち、父親と息子）の間には、強固なパワー（権力）関係が存在するとは考えにくい。そして、強固なパワー（権力）関係が存在しない場合、その2者間で直接発話行為を遂行することはあまり支障がないと考えられる。このように、元 FBI 長官と米大統領、そして父親と息子という社会関係の違いが存在しているにも関わらず、Trump Jr. 氏はその違いをすり替えていることから、Trump 米大統領による Comey 氏への感情表明型の直接発話行為が指示型の間接発話行為ではなかったという主張を証明していることにはならないと考えられる。

## 6. まとめ

本稿は、批判的ディスコース分析の観点から、Austin (1962) や Searle (1969) の発話行為理論を援用し、Donald Trump 米大統領と元 FBI 長官

James B. Comey 氏のやりとりの中で Trump 米大統領によって遂行されたとされる発話行為を分析した。そこで、本節では、Trump 米大統領の発話行為が Comey 氏によってどのように解釈されたのか、またその発話行為が Trump 大統領周辺の人物によってどのように弁明されたのか、そしてその発話行為に潜むパワー（権力）関係について考察する。

一般的に、パワー（権力）関係において、パワー（権力）がない主体には、「負担を課す（impositive）」発話行為（本例では、指示型の発話行為）が認められていない場合が多いと言われているが（例、Fairclough（2015）における警察と目撃証人による情報収集のための事情聴取）、映画『The Devil Wears Prada（邦題：プラダを着た悪魔）』においても同様の現象が具現化されていた。

また、指示型の間接発話行為（間接的な命令や要求）は、明らかなパワー（権力）関係や状況的コンテキストに依拠する。つまり、明らかなパワー（権力）関係や状況的コンテキストが揃えば、指示型の間接発話行為であったとしても、発語媒介目標が聞き手に伝達されるということである。今回の Donald Trump 米大統領によって遂行されたとされる発話行為の場合、米大統領と FBI 長官の間には明らかなパワー（権力）関係があるということ、状況的コンテキストとして（すでに何度かの会合において、FBI 長官としての職務を続けたいかどうかを問われたりした後）2月14日のブリーフィング後、大統領執務室に2人しかいない状況を作られたということ、そして感情表明型の直接発話行為における命題内容が要求（request）の命題内容条件のものと類似していたということから、James B. Comey 氏は感情表明型の直接発話行為（“I hope you can see your way clear to letting this go, to letting Flynn go. He is a good guy. I hope you can let this go.”）を指示型の間接発話行為として解釈したのだと考えられる。

Donald Trump 米大統領周辺の人物（Trump 米大統領を擁護するために公聴会に出席した共和党員、Trump 米大統領の顧問弁護士、そして息子 Donald Trump Jr. 氏）は、Trump 米大統領の James B. Comey 氏に対して向けられた発言（感情表明型の直接発話行為）を、指示型の発話行為遂行自体

の否定、または米大統領と FBI 長官から父親と息子へのパワー（権力）関係のすり替えなどに基づいて、指示型の発話行為ではないと弁明していた。ただし、共和党員の発言は、指示型の発話行為遂行を前提とするものであったことから、そして Donald Trump Jr. 氏による、「父親によって遂行される発話行為は直接的である、すなわち曖昧さが存在しない」という主張が明らかなパワー（権力）関係が存在しない父子という間柄に基づいたものであることから、Trump 米大統領によって指示型の間接発話行為が遂行されていないという主張は証明されていないと考えられる。

本稿は、語用論の主要なテーマの 1 つである発話行為理論を援用し、元 FBI 長官 James B. Comey 氏による Donald Trump 米大統領との会話メモ、および米上院情報特別委員会の公聴会における同氏の議会証言に関する *The New York Times* の新聞記事を分析データとして、発話行為に潜むパワー（権力）関係を検証してきた。今後も語用論と批判的ディスコース分析を結び付けた研究（Wodak 2007）を実践し、パワー（権力）を持つものと持たないものの間に社会的不平等を生じさせる言語使用としてのディスコースを批判的に分析することを続けていきたい。

## 注

- (1) 本稿は、佛教大学で開催された一般社団法人日本メディア英語学会第7回年次大会（旧社団法人日本時事英語学会通算第59回年次大会）におけるメディア英語談話分析研究分科会発表「談話分析研究の多様な視点」において、「発話行為の解釈に影響を及ぼすパワー（権力）関係の考察—発話行為理論を援用して—」と題して研究発表した際の実稿に加筆・修正を施したものである。
- (2) ただし、発話媒介行為において、必ずしも話し手の意図する発話媒介目標（perlocutionary object）が達成されるとは限らず、その場合話し手にとっては思いがけない聞き手の行為も発話媒介行為となる。
- (3) この警察官と目撃証人による情報収集のための事情聴取は、Fairclough (2015) による作例である。

## 引用文献

Austin, J. (1962) *How to Do Things with Words*, 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.

- Brown, G. and Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cameron, D. (2001) *Working with Spoken Discourse*. London: Sage.
- Cameron, D. and Pavonić, I. (2014) *Working with Written Discourse*. London: Sage.
- Fairclough, N. (1992) *Discourse and Social Change*. Cambridge: Polity Press.
- Fairclough, N. (2015) *Language and Power*, 3rd edition. New York: Routledge.
- Fairclough, N., Mulderrig, J. and Wodak, R. (2011) 'Critical discourse analysis.' In van Dijk, T. (ed.) *Discourse Studies: A Multidisciplinary Introduction*, 2nd edition. London: Sage, 357-78.
- Fairclough, N. and Wodak, R. (1997) 'Critical discourse analysis,' in T. van Dijk (ed.) *Discourse as Social Interaction*. London: Sage, 258-84.
- Fowler, R. (1991) *Language in the News: Discourse and Ideology in the Press*. London: Routledge.
- Holmes, J. (2008) *An Introduction to Sociolinguistics* (3rd edition). Edinburgh: Pearson Education Limited.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mills, S. (1997) *Discourse*. London: Routledge.
- 中島信夫 (2012) 「序章 語用論的意味」中島信夫 (監) 『朝倉日英対照言語学シリーズ 7 語用論』東京：朝倉書店, 1-12.
- 野呂香代子 (2001) 「クリティカル・ディスコース・アナリシス」野呂香代子・山下仁 (編) 『「正しさ」への問い：批判的社会言語学の試み』東京：三元社, 13-49.
- Searle, J. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Oxford: Basil Blackwell.
- Tannen, D., Hamilton, H. E., and Schiffrin, D. (eds.) (2015) *The Handbook of Discourse Analysis Vol. 1*, 2nd edition. John Wiley & Sons.
- Van Dijk, T. (2015) 'Critical discourse analysis,' in D. Tannen, H. E. Hamilton, and D. Schiffrin (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*, 2nd edition. West Sussex: John Wiley & Sons, 466-85.

- Wodak, R. (2007) 'Pragmatics and critical discourse analysis: a cross-disciplinary inquiry.' *Pragmatics & Cognition* 15(1), 203-225.
- Wodak, R. and Meyer, M. (2016) 'Critical discourse studies: history, agenda, theory and methodology. In R. Wodak & M. Meyer (Eds.), *Methods of Critical Discourse Studies*, 3rd edition. London: Sage, 1-22.

#### 分析データ

- "Statement for the Record Senate Select Committee on Intelligence"  
<https://www.intelligence.senate.gov/sites/.../os-jcomey-060817.pdf>
- "Comey Accuses White House of "Lies" and Says Trump Tried to Derail Inquiry"  
[https://www.nytimes.com/2017/06/08/us/politics/comey-hearing-trump-russia.html?\\_r=0](https://www.nytimes.com/2017/06/08/us/politics/comey-hearing-trump-russia.html?_r=0)